法衣

田中貢太郎

千住か熊谷かのことであるが、其処に某(ある)尼寺があって、その住職の尼僧と親しい壮(わか)い男が何時も寺へ遊びに来ていたが、それがふっつりと来なくなった。

尼僧はそれを心配して、何人(だれ)かその辺の者が来たならその容子を聞いてみようと思っていると、ある日その男がひょっこりやって来た。

「どうしたかと思って、心配してたのですよ」

「少し病気でしてね」

「もう好いのですか」

「ああ、もう癒りました」壮い男はその後で、「今日は一つお願いがあって来ましたよ」と云った。

「なんですか」

「法衣を貸してくれませんか」

「貸してあげましょうが、それをどうするのです」

「少し入用です」

で、尼僧は奥から一枚の法衣を持って来て、壮い男の前に置いた。壮い男は嬉しそうにそれを持って帰って往った。

そして、暫くして、何かの用事で尼僧が寺の玄関へ往ってみると、壮い男に貸したはずの法衣が置いてあった。玄関口を出て往く時に、壮い男がたしかに持って出たことを知っている尼僧は、不審でたまらな

かった。それでは持って帰っているうちに、もういらないようになったから、それで返しに来たものであろうかと思った。それにしても、何とか一言云うはずであるにと、物堅い壮い男の平生を知っている尼僧は、どうしても不審が晴れなかった。

其処へ壮い男の家から使いが来た。それは壮い男が長く病気をしていて、今日とうとう死亡したと云う知らせであった。尼僧ははじめてさきの壮い男は、壮い男が仮に姿をあらわしたものであると云うことを知った。

しかし、それにしても壮い男の幽魂が法衣(ころも)を借りに

来たことが不思議でたまらないので、その日、その家へ見舞に往って、壮い男の母親に向って、何か心当りがないかと云って聞いてみた。

「べつに心当りもないのですが、彼（あれ）の寝衣（ねまき）が後から後からと汚れるものですから、浴衣を着せましたが、その浴衣も皆汚れてしまったので、昨日から女の寝衣を着せましたところが、それを非常に厭がっていたのです」と、母親は涙を流しながら云った。

底本：「日本の怪談（二）」河出文庫、河出書房新社
１９８６（昭和61）年12月４日初版発行
底本の親本：「日本怪談全集」桃源社
１９７０（昭和45）年初版発行
入力：Hiroshi_O
校正：門田裕志、小林繁雄
２００３年７月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。